

ラブガイル！

いろはにはへと??

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「推薦取れるようになるぞ?」

「戸塚も一緒だと?!」

打算に満ちた考へで共学化試験生になつた比企谷八幡  
思つたよりもハードな毎日

気づけば、sに協力していたんだが……。

「やはり俺の青春ラブコメはまちがつて いる。」×「ラブライブ！」

※オリジナル展開なので順番等をずらす場合も。あしからず。

目

次

T h e r e i s n o t e l l i n  
g w h a t w i l l h a p p e  
n.

66

笑顔を見せて	61	Pe a c h m i n d	始まりは魅力的な提案に
また一つ	57	遅刻は許せません	交換条件は時に優しい
なにか溢れそうで	52	甘いセリフは自己満足気味で	と、戸塚ああ！
大天使とつかたん	43	思索の結果	
ただの思い込みか	37		
なにか溢れそうで	31		
大天使とつかたん	27		
なにか溢れそうで	22		
大天使とつかたん	17		
なにか溢れそうで	12		
大天使とつかたん	8		
なにか溢れそうで	1		



# 始まりは魅力的な提案に

「試験生？」

俺は目の前にいる女教師の言葉を復唱した。

「そうだ。君と戸塚には音ノ木坂に試験生として行つてほしい」

平塚先生はそう言つて、満面の笑みを浮かべた。

× × ×

放課後、今日は部活がないと聞いた俺は、一刻も早くマイエンジンジエル小町のもとへ向かうために木材屋とかいろいろ躲して昇降口へ急いでいた。

「2年F組 ヒキタニくん。至急、職員室平塚先生のところまで行つてください」

天井に設置されているスピーカーが鳴る。同時にヒキタニくんが呼ばれた。

平塚先生か、可哀想に。頑張つてね、ヒキタニくん。

「あ、平塚先生だ」

女子生徒の呟きが聞こえた。

何か嫌な予感がした俺は、すぐに靴を履きかえ、戸を横に引き、天国へのゲートを素早く開いた。

俺はその勢いのまま、こんなところから早く解放されよう、と力強く一步目を踏み出した。

「おい比企谷、どこへ行くんだ？」

意地の悪そうな笑顔の独神はそれを許さなかつた。

× × ×

「なんで俺が。てか、音ノ木坂つてなんすか」

敬語ともいえないような言葉で、俺は率直な疑問を投げかけた。

「君が最適だと思つてな。……ぶつちやけ私が推薦した」

「はい？」

「ついでにもう一人はくじで決まつた。……もちろん強制という訳では無いが、内申は当然上がる。どれくらいかと言われると……、推薦は取れるくらいに」

言いながら、胸ポケットから煙草を取り出す。

平塚先生はここが職員室だと思い出したのか、逡巡するように視線をさまよわせる。  
正直、推薦というのはおいしい話だ。

成績はそれなりだし、私立ならまああのところに推薦はして貰えるはず……。

俺が揺れているのを確認すると、平塚先生は言葉を続ける。

「まあ、君の志望している大学には推薦で行けるだろうな」

「行きます」

即答してしまう。当たり前だ。センターなんて受けてられるか。

「そうか。戸塚にはもう話がついてるから」

それから概要を聞いて、俺は音ノ木坂学院に共学化試験生として行くことになった。  
俺は今、戸塚と音ノ木坂の校門の前にいる。

理事長からの事前の説明では、初日から皆と同じく八時半までに登校。最初は職員室  
ではなく理事長室に来いということだった。

しかも俺だけ。

ていうか、なんで生徒二人のために理事長出てくんだけよ。

反対する理由も特になく、俺は七時四十分頃 にはすでに駅からの通学路を歩いてい  
た。……ふええ、視線が痛かつたよ。

「八幡、そろそろ入ろ……？」

戸塚が少し顔を赤らめて俺を見ていた。

……え？ こんなところでラブコメが……？

「そ、そうだな」

しどろもどろに答えると、戸塚ははにかむ。

「寒くて……。ほら、頬なんてこんな真っ赤」

あ、なんだ、ラブコメは始まらないのか。

× × ×

突き刺さるような視線に耐えた俺たちは、昇降口で事前に準備しておいた靴に履きかえた。

そこから理事長室に向かうために廊下を歩いていると金髪碧眼の容姿端麗な女子生徒が目先が見えないくらいの荷物を持つていて見えた。

それを俺たちはしっかりとスルー、できなかつたので、持つていたものを少し受け取り、視線で先に行けど送ると少し困った表情をしたが、彼女は、ありがとうと呟いて微笑んだ。

人に感謝されるのは初めてな気がする。だが、なぜか既視感がある。

そうだ、あれは中学の頃のことだ。当時、自分の好きだつた子が同じシチュエーションで重たそうに荷物を持つているのを見て声をかけて持つてあげたら、ありがとう、優しいんだね、と褒めてくれた。おかげで、その日は夜中までずっとハイテンションで寝つけなかつた。

次の日も少し高めなテンションで登校すると、教室から彼女の声が聞こえた。

「昨日さあ、ヒキタニ？ キモタニだつけ？」  
がさあ、私の荷物いきなり持つて急に手伝いだしたんだよね。超キヨドつた上にありがとうって言つたら嬉しそうでマジ気

持ち悪かつたあ」

まあ、俺くらいになるとこれは良い思い出ですよ。ホント、ホント。ハチマンウソツカナイ。

「どうしたの急に泣き出して」

女子生徒が慌てている。

「いえ、ちょっとと思い出し泣きを」

「ハラショー……。思い出し笑いみたいに使うのね」

少し引き気味の彼女は、そのまま俺を先導して『生徒会室』に入つていった。

生徒会に関わつてゐるのか、と少し驚いたが口にせす俺も続いて生徒会室に入つた。ぐるりと見渡すと、紫がかつた黒髪の女子生徒がいた。少し余裕のありそうな表情と見定めるような感じはどこかで会つた部活仲間のお姉さんのようだ。つまり関わりたくないです。

俺は似非雪ノ下陽乃を避けるように静かに物を置き、一礼をして素早く去ろうとした。

だが、グイッと肩を掴まれ、後ろに引き戻された。驚いて振り向くと彼女は笑みを浮かべ

ていた。似非陽乃さんだよホラ。

「私は生徒会副会長の東条希。よろしく比企谷くん、戸塚くん」

「よろしくお願ひします……」

あ、やべ。とつかわいい……。

「よろしく……、え、なんで名前知ってるんですか」

途中で気づく。

ねえ、やつぱり陽乃さんなの？ 雪ノ下建設の力なの？

「なんであつて音ノ木坂初の男子生徒やし、うちとそこにある生徒会長のエリチ、絢瀬絵里の提案や」

「よろしく、比企谷くん。実は共学化試験生を提案したのは私たちなの。理事長に提案したら先生をやつていてる友達に聞いてみるつて」

「あ、あと雪ノ下さんからも電話があつて使えなくて廃棄するということになりましたら当校が責任を持つて処分するのでいつでもご連絡ください、って言われたわ。ふふつ。あれをツンデレっていうのかしらね」

絢瀬先輩が微笑んだ。一切デレないんですけどツンデレっていえますか。大丈夫ですか。

すると突然、東條先輩が心配そうな顔で俺に訪ねた。

「そういえば比企谷くん、戸塚くん、この学校に男子二人で大丈夫なの？」

……？　何を言つているのかうまく飲み込めなかつた。  
思案したところで俺は気が付いた。

あ、何も言われてないわ。

「ヒラツカアア！」

俺の絶叫が生徒会室に響き渡つた。

# 交換条件は時に優しい

コンコンコンと三回戸を叩いた。確か三回だよな。そういえば、『あいつノツクする回数も分からねえのかよキモガヤ』と言われた時は二回だつたから合ってるな。こんな風に嫌なことは忘れないものだから、逆説的に言えば嫌なことばかりの俺は知識豊富の天才ってことか。

「どうぞ？　どうかしましたか」

室内からの心配する声が遅れて耳の中に入ってきた。いかん、くだらないことを考えていて反応に遅れてしまった。

「すみません。おはようございます。比企谷です」

「おはようございます。前にも会ったわね。音ノ木坂で理事長をやっている南です。

よろしく」

落ち着いた挨拶を返してくれた南理事長はやはり人当たりがよさそうだ。てか、さつきまで理事長のこと忘れてたし、早めに登校しててよかつた。

「それで何故職員室ではなく理事長室なんですか？　しかも俺一人で」

俺が訪ねると理事長は、手元に視線を送る。俺もつられて視線の先を見ると、一枚の

紙があつた。

「部活設立申請書?」

俺は書いてあつた通り読み上げた。

「そうなの。スクールアイドルって知つてるかしら?」

スクールアイドル。以前、どこかの中二病に教えてもらつたことがある気がする。

『いいか、八幡。スクールアイドルというのはだな……』

思い出せない、思い出すのを拒んでいた。材木座自体が嫌な思い出ということか。あ、材木座じやん。名前思い出した。

「知りませんね」

「少し間がありましたが」

「ちょっと過去を振り返つてまして……」

「そう、実は知つているでしよう? 静ちゃんのお気に入りらしいし、期待してるわ」  
はい、知つてます。理事長の言うとおりです。

× × ×

「……それでスクールアイドル部をつくると」

理事長の説明を粗方聞き終えると彼女は嘆息を漏らした。

「つまり、理事長は部活をつくつてあげたいけど、予算がないうえに生徒会から猛反対

されていて困つてると」

確認するように尋ねると、理事長は静かに首肯した。

「それで！ 比企谷くんにはスクールアイドルたちの補助及び部の確保のお手伝いをしてほしいの」

それでつてなにおかしくない？ やつぱり面倒事巻き込まれちゃうのん？ やつべーわ、まじぱねえーわ。おい、驚きで戸部口調になちゃつたよ。やつべーわ。だが、俺は条件もなしに呑み込めるほど人間ができていない。

「まあ、理事長の頼みなら仕方ないですね」

俺が話に乗ると思わなかつたのか理事長はぱあつと笑顔になつた。

「ありがとう！」

「その代わり、全校集会での自己紹介はなしでお願いしますね」

「……仕方ありませんね」

独神のおかげで耐性ができたからな。理不尽でもやることはやる。

……働きたくねーな。

「実は今日の話これだけなんです」

理事長が申し訳なさそうに言つた。

これからの中高生生活のアドバイスとかないのか、というかそれが本題だと思つてきた

のに、仕事をすることになるなんてハチマンカナシイ。

「そうですか、ところで自分のクラスが分からないんですけど」

「確かあなたは2年B組よ。これから一年間頑張ってね」

理事長との会話、というか交渉を終え出口の方へ向かうと、話し忘れたことがあつたのか声をかけられた。

「言い忘れていました。私には娘がいるの。その子今ここに通つているのよ。あなたと同じ二年生よ。名前は『南ことり』母親の私からよろしくしておくわ」

「南ことり……、つてさつきのスクールアイドルを目指しているやつらじゃねえか。娘さんだつたのかよ。」

驚いたが、まあそんなことはどうでもいい。全校集会で自己紹介なんて噛んで確実に黒歴史になることよりも、機械的にやつていくスクールアイドルの補助の方が簡単だろう。

とりあえず今は南ことりが同じ二年B組にならないことを心から願おう。

俺は理事長の方に軽く会釈した。

「それでは失礼しました」

と、戸塚ああ！

俺は今、生徒会室にいる。何故かつて、何故でしうね。

教室から出た時に東條先輩と絢瀬先輩がいて連行されたんですよね。

……せめて戸塚をくれ……。

「比企谷くんこれ手伝つて」

「はいはい」

だからなんで俺手伝つてんだよ。

「なんで俺手伝わされてるんですか」

俺の問いに絢瀬先輩はにつこりと笑つて答えた。

「生徒会の人数が足りないからよ」

やつぱり俺に拒否権はないんですね。

仕方ないので手伝つているとコンコン、と二回戸が叩かれた。

残念、正解は三回でした。

「失礼しまーす」と言つて入つてきたのは同じクラスの高坂、園田、南。

覚えているのはクラスに入つた時に尋問されたからだ。高坂に。

園田大変そうだつたな……。

「会長！」

突然、高坂が叫んだ。呼ばれた絢瀬先輩はどうしてか一気に冷めた表情になつた。

「だから何度も無理だつて言つてるでしよう。それよりもあなたたち直接理事長のところへ行つたそうね」

「行きましたが」

全く怯んだ様子のない園田が答えた。

「規定では先に生徒会を通さなくてはいけないのよ。前も説明をしたでしよう？ つまり私たちが許可を下ろさなければ部は作れないの。それに最低条件で生徒五人以上が必要よ。まあ既にアイドル研究部という部があるし人を集めても許可することはないわ」

なるほど……、どうしたらいいんだよ……。

絢瀬先輩の発言で高坂たちは黙り込んだ。

「これ仕事無くなるんじやね？ キマシタワー！」 俺の仕事はここまでだな？ 諦める他に方法がないだろ。

だが、そこに彼女達にとつては救世主が現れた。

「つまり、アイドル研究部に入つて皆でやればいいんじゃない？」

「ちょっと希？」

東條先輩の言葉に絢瀬先輩が狼狽えた。

ホント何言つてんだよ。これで仕事しなくていいと思ったのに。

「分かりました！ありがとうございます！」

無駄に元気な高坂が話を遮るように言つた。一刻も早く部として認めてもらいたいのだろう。

「行こう2人とも！」

高坂が先導して、三人は生徒会室を足早に去つていった。三人が去り、部屋を静寂が支配した。だが、絢瀬先輩だけは東條先輩を咎めるように見ていた。

「希、どうしてあんなこと言つたの？」

聞かれた東條先輩は一息ついてからおもむろに答えた。

「エリチが出来ひんことやつてくれると思つたからや」

東條先輩の一言に絢瀬先輩は眉をしかめた。

「私にできないこと？ スクールアイドルのことかしら。希、あなたちゃんとリス

クは考えているの？」

「そうか……。

理事長から聞いた彼女たちの話は『スクールアイドルになつて学校を廃校から救う』一見この話はノーリスクハイリターンだ。だが、実際は違う。大成功して一番になるくらいでないと知名度はそう上がらないだろうし、結果が出なくて途中で挫折してしまうような事があれば『良い結果も残せず最後までもやり遂げられない音ノ木坂スクールアイドル』になつてしまふ。

「さあ？ 比企谷くんも手伝うみたいやし、どうなるのか楽しみやな」いつも通りの全てを知つているような顔の東條先輩。だからなぜ僕が手伝う事を知つてるんですか。これも東條先輩だから片付くんですか。

俺が東條先輩に質問しようと口を開いた瞬間、バンと机を叩くような音がした。振り向くと絢瀬先輩がジト目でこちらを見ていた。

「へえ、比企谷くんそつちにつくんだ」  
「え、いやまあ」

「ど」もつた俺を見て絢瀬先輩は嗜虐的な笑みを浮かべた。

「比企谷くん、あつちだけに付くのは不平等よね？ だからこつちのお手伝いもよろしくね。まずはグラウンド五周かしら。どうする希？」  
いやその理論はおかしい。だいたいグラウンド五周つて関係ないよね。やらせたいだけだよね。

「そうやね、じやあ五周頑張つてな  
だから、おかしいだろ。」

# P e a c h m i n d

「無理よ」

アイドル研究部長矢澤にこ。

弓道部の先輩から聞いたことがある。ツインテールで、いつも行動が痛い子がいる、だつたはずだ。

その彼女に、穂乃果を含めた私達はアイドル研究部への入部を頼みにきた。

だが、何度も言つても入部が認められることはなかつた。

「どうしてですか！」

穂乃果は既に二十分近く同じ質問を繰り返している。いい加減やめないと逆効果だろう。

「だから何度も言つているでしょ！ にこが一人で始めたこのアイドル研究部は、にこ一人で終えたいの！」

そう言つて矢澤先輩は机をバンと叩く。だんだんイライラしてきてるのが手に取るようになかつた。

このままでは絶対に無理だろう。

そう思つた私は、この話を後に回すために一度穂乃果を止めることにした。

「穂乃果、迷惑ですよ。そろそろ行きましょう」

私が穂乃果の左腕を掴むとすぐに、ことりが右腕を掴み補助をする。お決まりの動作だ。

「行くよ穂乃果ちゃん」

やだ、と粘ろうとする穂乃果をことりが説得する。

しばらく見ているとことりが耳元で何かを呟いた。瞬間、穂乃果は黙り込み、とぼとぼと出口に向かつた。今日は諦めるのが早いなと思っていると突然、下を向いていた穂乃果が顔をあげて叫んだ。

「矢澤先輩！ 今日は諦めても明日は絶対諦めませんから！」

穂乃果はその勢いのまま、失礼しました、と言つて部室を去つた。ことりもその後に続いた。

一人残つた私は矢澤先輩に向き直る。

「矢澤先輩、すみません。迷惑かけてしまつて」

私はそのまま、頭を下げた。

「もう来ないで」

聞こえた言葉は本心なのか。

私は、失礼します、と言うと部室をあとにした。

× × ×

私は今日は諦めるという結論に至つた穂乃果たちと別れ、東條先輩と話をするために生徒会室へ向かつていた。

戸を叩くと中から、「どうぞ」と声がした。私はそれを合図にして戸を開き中に入る。「失礼します。園田海未です。東條先輩はいらっしゃいますか?」

言いながら生徒会室をぐるりと見渡したが、東條先輩の姿はなかつた。

「希なら今日はもう帰つたわ」

私が東條先輩を探しているのを察したのか絢瀬先輩が呟く。

「わかりました。また明日お伺いします」

東條先輩がいないと知つた私は、すぐに去ろうとしたが、絢瀬先輩に引き止められた。

「ちょっと待つて、あなた」

「どうかしましたか?」

私が聞き返すと「どうだつたの」と一言だけ返された。この短い言葉に色々な意味がこもつていることは誰にだつて理解できるだろう。

恐らく矢澤先輩のことだ。

「絢瀬先輩の予想通りだと思いますよ」

私はあえて答えを言わずに返した。

「そう……」

私の返しに對して、絢瀬先輩は一言だけ呟いて黙り込んだ。何かを考えているというより何かを思い出している、それも良くない思い出なのか苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

ふと外を見るとかなり暗くなつてきていた。そろそろ帰つた方がいいかもしねれない。

「それでは私はもう帰りますね」

「ごめんなさい、引き止めてしまつて」

絢瀬先輩が申し訳なさそうに言う。

「いえ、気にしないでください、失礼しました」

生徒会室の戸を閉めると私は嘆息を漏らす。

恐らく、恐らくだが矢澤先輩はアイドル研究部を始めた頃か活動中に何かがあつてそれを気にしている。更に絢瀬先輩の表情の暗さから察すると絢瀬先輩も何か関わっているか事情を知つているのだろう。

私がそれを全て理解し、矢澤先輩や絢瀬先輩を過去から切り離さなければ私たちがスクールアイドルとして活動することは出来ない。そう考へると少し面倒だが、私はいつも

も穂乃果についていつてばかりなのだからたまには私から頑張るべきだ。

# 遅刻は許せません

チリリリリーー。

無機質なアラームの音が部屋中に響いた。

「まだ寝てたい……」

誰に言うわけでもなく一人ごちる。

なぜ夜は寝たくないし、翌日の朝早く起きれば良いなどと考えるのだろうか。朝の辛さを忘れてしまうのだろうか――。

いつものように一時間の二度寝コースに入りかけたところで今日も学校があるとうことを思い出す。

そう、いつまでもこうしてはいられない。今の俺には、マイスイートエンジエル小町ちゃんがいないのだ。

マイスウイート天使とつかたんはいる。

つまり、自分で朝食を作らなくてはいけない。とりあえず時間だけでも確認しようとして顔を上げ、時計の方を向く。

A M 10 : 40

……おはようございます。

× × ×

校門についた俺はゆっくりと生徒玄関への歩みを進める。

今は十分の休憩時間なのだ。もし、絢瀬先輩にでも見つかつたら何をやらされるか分からぬ。

生徒玄関前に着くと、そ一つとドアを開ける。生徒用の玄関が空いているとは思つてなかつたがラッキーだ。職員玄関は先生に会う確率が高いからな。

だが、この時間に鍵が開いているなんてセキュリティ甘すぎるんじやないか？　この学校。気を付けないと、中学生の頃に女子に誘われ、待ち合わせ場所に行くと誰も居なくて五時間待つて通報された目の腐つた不審者が入つてくるかもしれませんよ……。昔よく見た忍者のように忍び足で靴箱へ近づく。昔というのは小さい頃の話で中学生で病気を患つてた時の話じやないよ断じて。

一人くだらない思考に陥つていると視界の端に最近見慣れた金髪ボニー・テールが入つた。やっぱこうなるのね……。

「あら、比企谷くんじゃない。重役出勤かしら？　……つてどうして泣いてるのよ！」絢瀬先輩は俺をいじろうと思つたようだが、目の腐つた不審者のくだりから涙が止まらない俺を見ると言葉を潜めた。

「だから、前も言つたじやないですか……思い出し泣きだつて」

思い出し泣き、なんて言葉があるのかは定かではないがそんなことはどうでもいい。早くしないと十分休みが終わつてしまふのだ。

「ハラショー……」

少しというか、かなり引いている絢瀬先輩を尻目に、教室に向かう。一刻も早く行つて最初からいた体を装わなければいけない。幸い俺は影が少し薄い。少し。だから、今まで遅刻しても一度もバレたことがない。

いや、一回あつたわ。

× × ×

教室前に着き、背後のドアから教室内の様子を伺う。

……先生は来てないな。他の奴らもおしゃべりに集中している。入るなら今しかな  
いだろう。

「あ、おはよっ！ 比企谷くん！」

俺が教室に入ると高坂がこちらに向かつて大きく手を振る。  
おかげで教室中の視線が集まつた。

てか、何で気づいたのん？ ステルスヒッキーは？

「比企谷くん来ないから心配してたんだよ～」

南がほつとしたように言つた。

「八幡！ 心配したんだからね？」

先生もみんなも

あ、先生も知つてゐるんですね。ありがとうございますよな。という  
か戸塚……、かわいい。

「寝坊したんだよ、おはよう」

そう一言だけ返し、鞄を机に掛けて俺は眠りについた。

次は数学だ。

× × ×

「比企谷くん！ アイドル活動手伝ってくれるんでしょ？」

なぜ四時限目に寝た俺が昼食も食べないで放課後まで寝て入れたのかは分からぬ  
が、今は放課後だ。

いや、体育どうしたんだよ……。

「私達はそう聞いていたんですが、違いましたか？」

俺が何も答えなかつたのを不審に思つたのか園田が問い合わせる。

「ああ、理事長さんのご指名だ」

俺が皮肉っぽく言うと南が反応した。

「ごめんね、うちのお母さんが」

なんかあれだな。南からは天使のオーラを感じる。小町・戸塚に似たようなオーラ。  
「いや、別に気にしてない。……とりあえずこれからよろしくな」

「こつちこそよろしく！ 比企谷くん！」

人と話し慣れてなくて会話のキヤツチボールができない俺に高坂が優しく反応してくれた。あれ？ 目の腐った俺にこんなに優しいなんて実は俺のこと好きなんじやね？

……大丈夫だ。勘違いなんてしない。

ふと顔を上げると、戸塚と目が合つた。

見ると、あははと困ったように笑っている。

やべ、超かわいい……。

# 甘いセリフは自己満足氣味で

「お邪魔します」

放課後、高坂たちのスクールアイドル活動を手伝うことになつた俺は高坂たちに、いや、高坂に自宅だという和菓子屋、穂むら、へ連行された。

「すみません、無理やり連れてきてしまつて」

園田が声を潜めて耳打ちしてくる。

「気にするな、こういうことには慣れてる」

「そうですか……、すみません」

本当に、理不尽な教師のおかげだよ。全く感謝しないがな。

分かるぞ、お前も高坂に振り回されているんだろ？ 同情するぞ園田。

園田と二人、小声で話していると左前方から高坂の声が聞こえた。

「こつちだよ比企谷くん！ ついてきて！」

なぜかいつも元気な高坂に、俺は嘆息を漏らすとそれに続いた。

× × ×

「まず、矢澤にこを説得しなければスクールアイドル活動は始められない」

そんなことは由比ヶ浜似の高坂にも分かるだろうが一応確認する。

「分かつてるよ。大丈夫」

南が首肯すると園田もそれに続いた。

「先ほども言いましたが、矢澤先輩は高校に入つてから何かあつたんだと思います」

絢瀬会長も何か知つていてると思います」

これもまた確認なんだろう。まあ、アホの子がいるから仕方ない。そのアホの子はずつと黙り込んでいるが。

「んー、どうしたらいいんだろう。穂乃果ちゃんはどう思う？」

一切口を開かない高坂に南が問う。

だが、高坂は反応しない。

「穂乃果ちゃん？」

「穂乃果？」

再度、南と園田が高坂に問いかけるが話だす様子はなかつた。ずっと下向いてるし。

……もしかして寝てるのか？

俺がこいつ寝てるんじやないか、と二人に伝えると南が静かに近づいて耳元で何かを囁いた。それ前もやつてましたよね、いつも何を囁いているんですか。やはり僕の悪口

ですか。

すると突然、高坂が叫んだ。

「だめ！ それ私のパン！……あれ？」

「おはようございます。穂乃果」

園田が微笑んだ。

× × ×

結局あの後は園田の一時間お説教コースに入ってしまい、あまり話し合うことは出来なかつたが、ある程度方針は決まつた。

確か作戦名は「海未ちゃんの時のように誘おう作戦」だつたはずだ。

小さい頃、かなりの恥ずかしがり屋だった園田を友達にした時に使つたらしい作戦で、園田はかなり悶えてた。

その話を聞く限りはぼつち向けて、痛いことで有名な矢澤先輩もどうせぼつちだろうと思い、俺もこの作戦を了承した。

しかし、上手いくのだろうか。

園田は矢澤先輩が頑固になつてゐるのには何か理由があると考えていた。そのことについて絢瀬先輩が何か知つてゐるということも。

やはり明日、絢瀬先輩に話を聞こう。ぼつちが人にしかも先輩に話しかけるのは辛い

ものがあるが、生徒会を手伝わされているし、タイミングはいくらでもあるだろう。  
本当はやりたくないが、理事長さんご指名のお仕事だ。やる、しか選択肢は残されて  
いないのだ。  
働きたくねえ……。

## 思索の結果

高坂たちが作戦を立てた翌日の放課後、俺は一生徒会室前に来ていた。戸を三回叩き、いつものように「失礼します」と言いながら室内に入る。するとすぐに椅子に座つて作業をしている絢瀬先輩と目が合つた。

「比企谷くん、こんにちは」

「うつす」

挨拶をしてくれた絢瀬先輩に軽く会釈し、距離を詰める。

すると自然に絢瀬先輩が俺を見上げる形になつた。

「どうかしたの？」

俺は不思議そうな表情をしている絢瀬先輩に声をかける。

「单刀直入に聞きます。矢澤先輩の事です」

途端に絢瀬先輩の表情が曇つた。

× × ×

「エリチ、今日用事あつて生徒会いけそうにないんやよ」

放課後、すぐに生徒会室に向かおうとした私は希に声をかけられた。

「うん、分かつたわ。その代わり明日はちゃんと来てよ?」

了承の言葉を返すと「ありがと」と言呴いて、希はすぐに教室から出ていった。希が帰つてしまつたので、仕方なく一人生徒会室に向かう。

「絢瀬さんだ。かつこいいよね」

「でも話しかけづらいよね。雰囲気つて言うのかな。怖いよね」

廊下を歩いていると、私に視線が集まり、ひそひそと話す声が聞こえる。

それを出来るだけ気にしないように軽くあしらい、私は歩くペースを上げた。

職員室で生徒会室の鍵を借り、自室のような生徒会室に入る。

私はすでに指定席になつている端の席に座ると机に倒れ込んだ。

自分の腕に顔を埋め、目の前が暗くなつたと同時に少し前の女子の話を思い出す。

「怖いよね」

なぜだろうか。予想はついていた。

いつもの私の周囲への態度。

それが自分に余裕がないからだというのは分かつている。

それでも、目に見えない何かが、見ることの出来ない何かが私を突き動かすのだ——。  
トントントン。

思索に入りかけたところで突然、戸が叩かれた。

私は反射的に「どうぞ」と返す。

入ってきたのは比企谷くんだつた。

正直、私たちの方から行かないと彼は絶対に来ないだろうと思っていたからかなり意外だつた。

比企谷くんは室内をぐるりと見渡す。

私が挨拶すると、比企谷くんは軽く会釈して私の方へ近づいてきた。

「どうかしたの？」と尋ねると、彼はおもむろに口を開いた。

「单刀直入に聞きます。矢澤先輩の事です」

彼がはつきりと口にした矢澤先輩、という言葉に私は固まつてしまつた。

瞬間、かなりの罪悪感を感じた。

「どうして、そんなことを聞くの？」

私は出来るだけ余裕な態度を振舞つた。

「園田が絢瀬先輩は何か知っているんじやないかと」

「そう。それは思い違いよ。私は何も知らないの」

私ははつきりと言つた。

「そつすか。分かりました」

私は全く食い下がらない比企谷くんに違和感を覚えたが、彼は「ありがとうございました」と呟くと戸の方へ向かつた。

とりあえず『矢澤にこ』のことはこれ以上追及されないようだ。良かつた。

だが、彼は突然立ち止まりこちらに振り返つた。

「誰かに話すことでかなり減ると思いますよ。罪悪感って」

そう言つた彼は達観したような表情をしていた。視線の先は私でも、見ているものは違う。まさにそんな感じだつた。

「失礼しました」

私が返事する間もなく、比企谷くんは生徒会室を去つていつた。

一人、残された部屋で先の言葉の意味を忖度する。

だが答えは見つからぬ。

——結局、答えは見つからなかつた。

× × ×

教室に戻る。

室内はしんとしていると思いきや、戸塚がいた。

戸塚は俺を視界に入れると、俺に手招きする。

……つ、ついに来たか。放課後の逢瀬といえば……、一線を超えるのか！

どぎまぎと緊張しながら近づくと、戸塚は少し顔を赤らめ、上目遣いになつた。

「えつ？ マジなやつ……？」

「八幡……、最近一人で何かやつてるでしょ！」

「……何の話だ？ さっぱり分からん」

というか、戸塚に一人で何やつてんのって聞かれたのが下ネタに聞こえました。見ると、戸塚はどこか悔しそうだ。

「八幡、どうして頼つてくれないの？」

潤んだ瞳が俺の目と合う。

「いや、ほら、お前……、テニス部だし」

訥々と言う。

戸塚は気付かぬうちにテニス部に入つていて俺の手中から離れていた。

悔しい！ 悔しいぞ俺は！

「八幡がスクールアイドルのお手伝いしてるとつて知つてるからね？」

「高坂にでも聞いたのか？」

「うん、まあ。だから僕、兼部することに決めたから！」

いや兼部つて……。

「兼部というかまだ部活動でもないぞ」

「大丈夫！ 僕はマネージャーになるだけだから！」

「理屈通つてないんだけど……？」

……これが雪ノ下とかなら俺を論破するように、理詰めで話を進めたのだろう。  
だが戸塚は戸塚だ。

天使なのだ。

ならば俺は従わなくてはいけない。

「……まあ、そうだな。頼むわ」

「うん！」

戸塚は、ぱあっと明るい笑顔になつた。

# ただの思い込みか

「はあ、どうしたら良いんだろう私」  
物音一つしない静かな部屋で呟く。

しばらく思案していると、突然ガチャと戸の開く音が聞こえ、反射的に振り返る。  
「お姉ちゃん、どうかしたの？」

妹の亞理紗が私を心配したのか声をかけてくれた。

私に似たのか、似ていないのか、いい子だ。

「大丈夫よ。どうもしてないわ」

「本当に？　お姉ちゃんは無理をしすぎるから心配だよ」

亞理紗が心配そうな表情で呟いた。

「少しくらいの無理は必要なのよ」

私が亞理紗にそう返すと亞理紗は少し怒ったような、呆れたようなどちらともとれな  
い顔になつた。

「お姉ちゃんはいつも誰も頼ろうとしないし、その割には責任感とか強いのが心配な

の

亜理紗は本気で心配してくれているようだ。

「お姉ちゃんは優しすぎるんだよ」

亜理紗は小さく言い残すと自分の部屋に戻った。

私の頭の中で亜理紗の言葉が反響する。

私は自分が優しいとは思わない。

いつも周りに厳しい嫌なヤツ。

廃校の話が出た時だって私が一人で案を推し進めようとして生徒会の子たちと言い争いになつた。

それでもスクールアイドルのような危うい賭けには賛成できないのだ。

ただ、『矢澤にこ』のことだけは協力したいと思つてゐる。

見て見ぬふりをした私に責任があるのは当然なのだから。

× × ×

翌日、教室に着くと私は希の席に向かつた。

聞かなければいけない事があるからだ。

「希、おはよう」

「おはよ。どうかしたん?」

希はいたずらに成功した子どものような顔だ。

「昨日、比企谷くんが私のところにきたの」

「それで何かあつたん?」

ええ、もちろん。

「希、あなた比企谷くんに矢澤さんのこと話したでしょ?」

希のことだ。そう簡単に白状はしないだろう、と思いながらも問い合わせる。まあ、何が何でも問い合わせるが。

「少しや少し」

「その少しが問題なのよ!」

「にこつちがスクールアイドルを始めて失敗したこと、それを見て見ぬふりをしてしまつたエリチが無駄に気にしてるつてことくらいや」

結構話してますね。

「どうしてそんなことしたのよ。それに無駄についてどういう意味?」

私が不機嫌そうに聞くと希は少し微笑んだ。

「エリチは責任感が強すぎるんよ。それにいつも自分ばかりで自己犠牲的な部分もあるし、気にしすぎなんよ」

いつになく真剣な表情の希に言葉が詰まる。

「そんなこと……」

「実は自覚してるとちがう？ にこつちのことも」

「違うわ……そんなことない。それに矢澤さんのことは私が悪いの」

言い張る私に呆れたのか希はため息をついた。

「はあ、本当に面倒やなあ。うちらにも責任があるって言うんなら誠心誠意謝つてそれで自己満足するか……元気を出させるかしかないんやない？」

「元気を出させる？」

私は意味がよく分からなくて復唱する。

「せや。あとは自分でよーく考えるんや」

「ちよつと！ ヒントくらい……」

そう言いかけたところでホームルーム始まりのチャイムが鳴つて、私はしぶしぶ席に戻つた。

× × ×

カチカチと壁時計が時を刻む。

ふと顔をあげるとおばあさまとのツーショット写真が飾つてあり、自然と頬が緩んだ。

私は帰宅してからもずっと、希からの問い合わせ、つまり矢澤にこをどう元気づけるかとい

うことを考え続けていた。

それでも結局、良い案は浮かばず、もう一日が終わろうとしている。

「……インターネット！」

方法はないかとひたすら思案して、今一つだけ思い浮かんだ案。

インターネットに頼るのは正直好きではないが、方法が考えられないのだからこの際仕方がない、と自分に言い訳してスマートフォンを手に取る。

検索アプリを開き、文字を打ち込む。

「他人を元気づける方法」

検索をクリックするとすぐさま大量の検索結果が表示された。

私はその中から一番上のそれっぽい文言のウェブページを選び、開く。  
ページを開いてから少し流していると気になるものが見つかった。

「其の参 好きなものを与えるべし」

「注意 好きなものとはものだけには限りません。好きなことなど幅広い視野で相手を見直しましょう。きっと本当に欲しがっているものが見つかるはずです」

どこかのカルトか、とも思つたが、これが一番しつくりときた。  
どうしてか、と聞かれても答えることはできないが、これが正解だと思つた。言うならば直感だ。

矢澤にこが何を欲しがつてゐるか、何を求めてゐるか、今は分からな  
いが注視してい  
ればいつかは気がつくだろう。

今はそれを見落とさないよう気につけなくては。

# 大天使とつかたん

キンコーンとチャイムの音が鳴り響き、六限目の数学が終わる。

数学はもとから色んな意味で終わつてから寝て過ごした。

ホームルームが終わると、部活に向かう者や駄弁る者、すぐに帰宅する者など行き先はそれぞれだ。

勿論、俺は一刻も早く帰宅するために教室を出る。

スクールアイドル部？ 何の話だ。

「比企谷くーん！」

ああ……、聞こえないな。こんな馬鹿みたいに大声で人の名前呼ぶ常識ないやつとか知り合いにいながら。

瞬間、俺は走りだす。

背後から聞こえた声は少しづつ小さくなっていく。

自分の勝利を確信した俺はペースを緩め、何度も振り返りながら進む。

それ違う女子からは奇異な目線が注がれたが、マイスイートホームに戻るためならその程度のこととは気にしない。

だが上を向いて空ばかり見ていると、地面の穴に気づかないように、後ろばかり見ていた俺は気がつかなかつた。

目の前には、こちらに向けて弓を構えた園田海未が立つていた。  
とてもいい笑顔だ。

……早すぎない？ ホームルーム終わつたばかりだよ？

「こんにちは、比企谷くん」

……こんにちは。

× × ×

俺は園田に即座に捕えられ、高坂たちのいる教室まで連行された。  
てか、園田つて女子だよね？ 何この腕の力……。

「比企谷くん！ 何で無視したのさ！」

高坂は怒つているようだ。

今すぐ逃げたいがその選択肢は背後にいる園田に潰されているので戦うかモンスター・ボールを投げるしかなさそうだ。

ハチマンは、はなしをそらすを選んだ。

「それより矢澤先輩のことはどうなつたんだ？」

聞くと高坂が胸を張つた。由比ヶ浜にかなり似ていると思つたがここは全く似てな

いのね。

「比企谷くん？」

あははは！　南さんがニコツとしてるよ！　あはは！  
「それを言いたかつたんだよ！」

南の様子に少しも気づいた雰囲気のない高坂は話を続けた。

「うまくいきました！」

「へえ、予想外だな」

「戸塚くんのおかげでもあります！」

「おお……！　さすが戸塚！」

戸塚はどこだ！　戸塚を出せ！　あの天使は可愛い上に有能なのか。  
嫁に欲しい。

とりあえずまあ、戸塚が俺の知らぬ間に馴染んだようでほつとした。

「実はもう一つ報告があります」

もう一つ……。矢澤にこの件しか無かつたはずだが。何かあつたのか？  
「比企谷くんきつと驚くよ！」

高坂が嬉しそうに言う。

「メンバーが三人増えました！」

「へ？」

俺は驚いて素つ頓狂な声を出してしまった。

正直、俺はあれだけ反対されてたスクールアイドルなんて集まるわけない、と思つていた。

それが、三人も増えたのだ。

驚いても仕方が無いだろう。

「そうか……凄いな」

俺が口から洩らした言葉に南が反応する。

「本當だよねー。まさか三人も！　しかもいきなりだつたからびっくりしちやつた

！」

「実は三人を呼んであります。まあ部活に入つたので当然なのですが

え？　嘘でしょ？　このまま挨拶の流れ？　ぼつちはきついんですけど……。

そんな状態の俺に園田は気付くことなく、三人とも入つてきてください、というと「失礼しまーす！」とかなり元気な少女がまず入つてきた。

続いて小動物っぽい女の子、ツンツンした少女。

てか、二番目の子絶対天使だろ。天使何人いるんだよ。

小町、戸塚、南……、はさつき本性見た気がする……。

俺の思考回路がショート寸前というところで、オレンジ色っぽい髪色の元気な少女が口を開いた。

「誰にや？ この目のこわいひと」

まあ、予想はしていた。していたが、なまじ美少女なだけあつて古傷が……。

「り、凛ちゃん失礼だよ！」

天使（仮）が失礼極まりない凛ちゃんを叱る。

天使がいるぞ。天使だ。ああ、天使様！

「あの、大丈夫ですか」

天使様が心配してくれるだと……？

「ああ」

恥ずかしくて短く返すと、天使は安心したようにほつとため息を漏らした。

そうだよね。目がやばいし怒らせたら怖そうだよね。

「えっと、私は小泉花陽つていいます。こちらは友達の凛ちゃん。星空凛ちゃんです」

天使 小泉はそう言うと隣の活発そうな少女を見た。

「よろしくにや！ それでこっちにいるのは真姫ちゃんにや」

星空に紹介された真姫、という少女がこちらを一瞥した。同時に目が合った。そんな

に見て俺のこと好きなの？

だが彼女はすぐに目を逸らした。

瞬間、俺は察してしまった。

「どうも、西木野真姫……、です。よろしく……」

少し恥ずかしそうに自己紹介する西木野を見て、俺は更に確信を強めた。  
さつきから一言も喋らなかつたことに加え、必要最低限の挨拶。そして、実は強気で  
信念が強そうな瞳。

……こいつ、絶対ぼっちだろ。

「ぼっちだろ……」

気がついた時には、時すでに遅しというやつだつた。

俺は口から漏らしてしまつたのだ。

恐る恐る西木野を見ると、顔を赤く染め、いかにも怒つてゐるという様子だつた。

「な、なに言つてんのよ！　この人、意味わかんない！」

そう叫ぶと彼女は高坂のもとへ向かつた。

「ねえ！　誰なんですか？　あの目の死んでる人！」

はい、随分ストレートに言いますね。ご立腹のですね。

「比企谷くんだよ、スクールアイドル部のマネージャー、なのかな？」

高坂が首を傾げる。

「本当だよな。俺つてなんなんだろうな」

「この人が言うと病んでるようにしか見えないにや」

星空がストレート過ぎて辛いです。

俺が立ち直れなそうになつていると園田が手をパンパンと二回叩いた。

「三人の挨拶はだいたい終わりましたね。では、比企谷くんも」

まあ、俺がするのは当然だ。一人だけ男子で目が腐つてゐるし、通報されかねない。しかも指示したのは園田なので逆らえないと。

「比企谷八幡 二年だ」

「え？ これで終わりですか？」

俺がぼつち流の自己紹介を終えると小泉が驚き、西木野も何かに心底驚いたようだつた。

「先輩だつたのね、この目のやばい人」

まだ怒つてるだろお前。

西木野の怒りを鎮めようと思索するが、特に思い浮かぶ案はない。

俺が逡巡するように視線をさまよわせると、不意に高坂と目が合つた。

すると高坂は「あ！」と声を出す。

「戸塚くんもいるんだよ！ 戸塚彩加くん！ えつと……、戸塚くんは正式なマネー

ジヤー……、だよね?』

高坂の視線の先には俺ガイル。

「おう。戸塚は天使だ。マネージャーか天使なのか聞かれると天使なマネージャーだ」

「は? 何言つてんのこの人』

うーん。まだ分かんないかい。

論理的な思考でロジカルシンキングしたら分かると思うだけだな……。

「まあ、比企谷くんは戸塚くんの話になると急に気持ち悪くなりますからね。あ、急にじやなかつたです』

見ると、園田はなんか幸せそうだ。

俺の周りドエスが多すぎるんですけど?

俺はコンセンサスを得るのを諦めると、こつそり教室を後にする。

戸塚と逢瀬でもするか——。

……まだ部活中か。



# なにか溢れそうで

「で、矢澤先輩は？」

さつきから気になつていたのだが、せつかく説得したというのに矢澤にこがこの部屋にいないので。

「矢澤先輩なら補習です。もう少しで前期中間テストだというのに、数学の小テストで二十問全てを間違えたそうです。本当にたるんでいます！」

園田が俺たちに内通する。園田は自分にも他人にも厳しくて、高坂たちに恐れられている部分があるから、きっと矢澤先輩もしごかれるだろう。

まあでも数学なら仕方がないと思う。あ、違うから。自分に甘いとかじやないから。

「それで、とりあえずは部になつたんだな？」

「はい。ですが一つ問題があつて……」

そう言うと園田は心配そうな顔をした。

「問題？」

問題、と言われても俺は全く思い浮かばない。

元からあつた部に入つて、部員も八人、つまり五人以上いるのだ。

最低条件は満たしているはずだ。

「実はさつきお母さんに言われちゃつて」

「何を？」

俺はノータイムで返す。

すると南は佇まいを直すと、他人の真似をするように表情を変える。

「部の存在は認めます。けれど勉強面が疎かになつてはいけません。前期中間テストで誰も赤点を取らないことを条件に活動及び部への支援を認めますつて言われちゃつて……」

南がしょんぼりとする……。

天使というか小悪魔というか……。

というか少し似てたな。

だが、条件的には難しくないはずだ。むしろ簡単だ。

赤点は基本的に三十点以下。もともとそんな点数は勉強しなくても取れるようなものだ。数学以外。

意外と南理事長優しいんだな、と思っていると西木野が口を開いた。

「随分、優しい条件よね。クリアしたら活動していなくて部への支援が全くない今の

アイドル研究部に支援してくれるって言うんだから。実は理事長さんかなり優しいのね」

西木野も同じ考えのようだ。すると園田が西木野を制した。

「真姫は遅れてきたから知りませんでしたね。実は今この中に二人、その信じられないほど優しい条件をクリア出来ないという人がいました。この場にはいませんが、矢澤先輩は確定でしよう」

園田が高坂と星空に目配せする。

「大変申し訳ありません!」

「ません!」

園田と目が合うと二人は同時に机に頭をつけた。

正直、こいつらだとは思つた。高坂はお察しの通りだし、星空は見るからに勉強ができないなさそうだ。

……なんで星空さんは睨んでいるんだろう。

「数学！ 数学だけどうしてもダメなの！ 小学生の頃から苦手だつたでしょ？」

高坂が園田と南に同意を求めるように訊く。

「凛は英語、英語だけは……だいたい日本人なのにどうして英語をやらなきやいけないにや！」

「屁理屈はいいの！」

西木野が机をバンと叩いた。同時に俺に名案が浮かぶ。

「高坂は園田が担当するだろ？ なら星空は？」

「そうですね……。凜は……、真姫ですかね？」

言いながら園田が西木野を一瞥する。

「な、なんで私なのよ」

まあ、余裕だと言つていたし、園田が西木野を選ぶのは当然だと言える。  
だが、もつと適任者がいるのだ。園田のような自他ともに厳しい人間が。

「俺の元部活仲間に滅茶苦茶頭いい奴がいるんだが、どうだ？ 賴んでみないか？」

「一応女子だ。教え方はかなり上手いし、客観的に見ても美人だ」

「それは良いですね！ ゼひお願ひしましよう」

園田が食いついた。

「凜、知らない人に教えてもらうのー？ どんな人にや？」

どんな人、難しい言葉だ。優しい人なんて抽象的な言葉じや受け止められないだろう  
し、何より優しい人じやない。

だとしたら、身近な人で例えるのが一番分かりやすいだろう。

「性格は園田似だ」

「却下にや」

おつとこれはまずい。即答だ。星空の背後で笑つてゐる園田が見える。  
「凛、それはどういう事ですか？」

園田はにこにこしながら底冷えするような声で星空に問う。

「あはは、言い間違えにや！ そう言い間違え！ 凛はその人がいいにや！」  
「そうですか。分かりました。ではそうしましようか。比企谷くん、お願ひできます  
か？」

「はい」

俺は初めて有無を言わさぬ、というものを体験した。

# また一つ

あの後は土日に勉強合宿という形に収まり、まず基礎くらいは教えようと勉強会イブみたいになつた。

ちなみに俺にも飛び火した。

高坂が解けないという問題で、突然園田が「それはあまりにも常識的すぎるの、比企谷くんに見本を見せてもらいましょう」などと少し失礼なことを言わされて押し付けられた。

もちろん解けなかつた。

無事に問題がある三人の仲間入りを果たした。

三時間ほど園田のマンツーマン特別数学学習を続けて、否、続けさせられていた。

「辺りも暗くなつてきたので帰りましよう」と小泉のおかげで今日は一旦開放された。いつもならすぐに昇降口に向かうのだが、今日は生徒会室に向かつていた。もう遅い時間なので会長が残っているかは分からぬが、行くだけ行つてみようと俺は思い立つたのだ。

生徒会室に着き、廊下に漏れ出す光を確認する。

再度明かりを確認し、いつもの動作で戸を開け、生徒会室内に入る。

俺は入るとすぐに、室内を見渡すまでもなく、いつも絢瀬先輩が腰をかけている席に視線を送る。

目に入つた目的の人は机に肘をついて、ぼーっと外を眺めていた。

クオーダの上に金髪碧眼、おまけにスタイルも抜群。完璧美人としか言い表せないような彼女はそれだけで絵になつた。

俺がゆっくり近づいていくと足音に気づいたのか、絢瀬先輩は視線をこちらに送つた。刹那、透き通つた碧眼目が合う。氣まずい雰囲気が流れた。

絢瀬先輩はその空気を変えようと思ったのか、俺よりも先に口を開いた。  
……ぼつち系男子はこういう女子のさり気ない優しさで好きになつてしまふので気をつけてください。

「比企谷くん？　どうかしたの？」

当たり障りのない言葉。

こんな完璧美人に気を使われているとすると、今すぐ帰つて壁に頭を打ちつけたいところだが、今日は報告することがあるので。というかアパートだから怒られるし……。

「はい。報告があります」

「報告？」

また絢瀬先輩は不思議そうな表情をした。心当たりがない、といつたところだろうか。

「スクールアイドル活動ができるようになりました。まあまだ一つ条件はあるんですけど」

一つの条件、もちろん赤点を取らないという条件だ。馬鹿にされているようでついにやけてしまう。

「できるように？ どういう事？」

明らかに認めたくない絢瀬先輩に俺は極めて業務的に伝える。

「アイドル研究部は矢澤にこを部長に、高坂、園田、南の三人と西木野真姫、小泉花陽、星空凜が加わって七人になりました」

絢瀬先輩は心底意外そうだった。

「そう、意外……ね。悪いけれど絶対にうまく行かないと思っていたわ」

「まあ俺もです。矢澤先輩が認めてくれるとは思いませんでしたから」

俺がそう返すと絢瀬先輩は安堵したようだつた。

……やはりこの人はとても優しい人なんだな、俺はそう確信した。

「そろそろ帰ろうかしら」

脈略もなく呟くと、絢瀬先輩は先まで整理していた資料を片付けスクールバッグを肩にかける。

「そっすか。じゃあ俺もそろそろ」

「玄関までは一緒に行きましょ?」

「まあ別にいいっすけど……」

生徒会室を出ると俺も鞄を手に取る。部活動も終わってしまったのか、鬱屈とした静けさだけが周囲に滯っていた。

お互い特に話すこともなく昇降口に着き、玄関を出る。

時期相応でない風の冷たさに俺は軽く身震いした。すっかり夜闇に包まれた空は欠けた月が煌々と映し出されていた。

「まあその……敵みたいなものだけど……」

突然口を開いた絢瀬先輩はそこで一旦言葉を区切る。

「頑張つてね」

また一つ、先輩の優しさを知った。

## 笑顔を見せて

「た、たすけてにや！」

リビングの真ん中に置かれたテーブルを使つてゐる星空が、ソファに座つてゐる俺たちに向かつて手を伸ばす。悪いな、星空。生憎だが、俺は助けられないんだ。

「静かにしなさい。そして早くこれを解きなさい。そもそも、にや、つてどういうことかしら。猫への冒涭だと受け取つてもいいのかしら？」

星空の間からちらつと雪ノ下が見えた。猫への愛情は相変わらずのようだ。

「にやー！」

星空が頭を抱えてテーブルに伏す。

……諦める星空。

「た、たすけてー！」

「うわあ！ わかんないよー！」

叫声が聞こえて振り返る。今度は高坂だつた。あと由比ヶ浜。二人で頭を机に擦り付けて、伸びた。

俺？ 俺は西木野が担当するということで園田鬼教官からは逃れた。本当は園田にしごかれるはずだったのだが、中一レベルからできないことがばれてしまい、もつとしごかれると思ったが、一番できる後輩に教わることになった。ばれてよかつた……。というか俺以上に由比ヶ浜ができないおかげで逃れた。一色は思つた以上にできる子で、南と一緒に矢沢先輩に教えていた。小泉は時々こつそり星空に教えては、雪ノ下に甘い、と怒られていた。

おかげで二つあつたテーブルは使われていて、「テーブルないし無理だな」と言つたところ俺は床でやるという結論になつた。……といふか後輩に中一レベルのところで間違つてゐる、つて注意されるのがなかなかきついんですけど……。

だいたい今日は土曜日だ。本来なら間違ひなく一週間で一番幸せな日のはずだ。

遅寝遅起き、昼ごはん。なんとなく本を読んで寛ぎ、気づいたころには夕方六時。その後は夕食をとり、風呂に入つて、翌日のプリキュアに思いを馳せながら眠りにつく。それが土曜日のテンプレだ。

そもそも、西木野や小泉、南は勉強会に参加する必要はない。  
が、高坂と星空に強制参加させられた。ほんと高坂たちに甘いな。

俺は……参加しないはずだった。だが前に、数学ができないということがばれてしまつっていたので、園田による強制参加を食らいました。ついでに無理やり俺の部屋で開

催することが決定されました。帰りたいです。

「八幡！ ちゃんとやつてるの？」

「お、おう戸塚……愛して……間違えた……ちゃんとやつてるぞ」

「ホント？」

「ぐはつ！」

遠慮がちに下から覗いてくる戸塚の火照った頬を見て、あと五時間は頑張ろうと思つた。

× × ×

強制的な勉強会から三時間ほど経過して、俺たちは今、千葉県民御用達のサイゼリヤにいる。

十時に勉強会が始まつたので、今は一時だ。混み合う時間ではあるが、真昼よりは少ないだろう、ともちろん俺の提案でサイゼにきた。

俺の予想は外れて、結構混んでいた。しばらく待つて席に着くと、隣の席がカツプルのようで声が漏れてきた。

「隣、ずいぶん多いな。何席に別れているんだ？」

「分かんないけど、湯神くん変なこと言わないでよ？」

「当たり前だ。あなたとは違つて常識あるからな」

「私だつてあるから！ というか百瀬さんも入れて三人同時に転校つて何の運命なの？」  
しかも同じ学校だし。……ご飯食べる時くらいイヤホンやめたら？」

「いや、無理。今、平樂いいところだから。あなた鰐沢つて知らないでしょ」

……いや、どういうことだよ。なんで彼氏さん落語聞いてるの？ リア充はこんな感じなの？ 友達いたことないからわからんないけどさ……。

変なカツプル？ の話から耳を離し、テーブルの方に視線を送ると皆一様に不思議そ  
うな顔をしていた。

「どうかしたのか」

俺が問うと、西木野が答えた。

「斜め前よ、ほら右の方の」

西木野が指をさしたほうを見ると、一人変態っぽいのがいたが、普通の二世帯家族に  
しか見えなかつた。

「あの人たちがどうかしたのか」

「分からぬの？ 耳を傾けなさい」

「ちょっと、先輩。本ばかり読んでないで注文してください。……ドリンクバーは？」

「はいはい、彩花さんと真弓さんは？」

「彩花はー、これとー、これかな？」

「彩花、てめ気持ち悪いんだよ。きやびるん、みたいなのが！　ああ、鳥肌立った」「ご、ごめんね。真弓さん。こういうのって年齢制限あるし、気に入らないんだよね？行遅れみたいで……」

「ほら、そこケンカしない！　シロさん、縄はしまう！」

「えー、宇佐くん……、ひどいよ。昨日あんなに縛つてくれたのに」「縛つてねーよ！」

ふう、なんだ、このサイゼ。変人も御用達なの？　というか变态だな、あれ。小泉とか絢瀬先輩とかかなりひいてるし。  
……さつさと食つて出よう。

There is no telling what will happen.

六月も半分ほど過ぎると、毎日の湿度の高い嫌な空氣に体が慣れ始めていた。放課後、俺は寄り道することなく部室に向かっていた。理由は簡単。テストが明けて一週間経ち、今日で全教科返された。部費の支給や活動が決まる各自のテスト結果を聞かないわけにも行くまい。

ノックもせず、無遠慮に戸を開く。後ろ手で戸を閉めると高坂と目が合った。

「あ、比企谷くん！ テストどうだつた?!」

「うお、お、おう……まあ」

高坂の快活さに気圧され、しどろもどろになりながらも悪くはなかつた結果を伝え  
る。

心配で室内をぐるりと見渡すと、星空が俯いていることに気がついた。

「ほ、星空？」

声をかけると星空が俯いていた顔を上げた。その瞳はしつとり湿っていた。

ダメだつたかー、そう思つて慰めの言葉をかけようとするが、うまく言葉が浮かばない。こういう時に普段から人とコミュニケーションを取らなかつたことを後悔する。

「ヒツキー先輩……」

「ヒツキーはやめろ」

「凛、頑張つたのに……」

星空がぎゅっと拳を握りしめる。

ああ確かに頑張つた。でも、頑張つた結果なら甘んじて受け入れるしかない。努力と結果は必ずしも比例の関係とは限らない。努力が人を裏切ることだつてあるし、結果が追いつかないことだつて、往々にして、ある。

「凛、凛……」

星空がまた俯いて、自分を責めるように何度も復唱する。  
しかし突然顔を上げた。

「五十五点しか取れなかつた！」

星空はにこぱつと笑いながらピースを添える。他の奴らは最初から知つていたのか、確かに驚いていなかつた。

「おいおいマジかよ。お兄ちゃん信じちゃつたよ……」

「はーい大成功！」

見れば矢澤先輩が笑っていた。

「とりあえず問題児は解決か」

「ええ、そうね」

矢澤先輩はまた人好きしそうな笑みを浮かべる。べ、べつに俺は口リとか興味無いんだからねつ！ つて矢澤先輩俺より年上だつた。

あ、大事なことを忘れていた。

「というかどう考えても一番の問題児、先輩ですよね。さつきの雰囲気に乗つて実は赤点とかじやないですよね？ 俺マジそういうの無理なんで。あと小さい子は好きだけど中身口リとか無理なんで」

「辛辣?! ていうか途中から意味わかんないし……」

「まあ要するに矢澤先輩が信用に足らないってことです」

「あんた私にだけ辛辣よね」

ひとまず全員セーフで安心してへらへら笑つていると、パソコンを見ていた小泉が「た、助けてえ！」なんて叫び始めた。

何事かと皆一斉に視線を送る。普段なら注目されると恥ずかしがるくせに今日は違つた。俺たちは急いで駆け寄つた。視線の先の画面には『ラブライブ開催』と書いてあつた。

皆が口々に「ラブライブ?」とまるで不思議なものでも見つけたかのように問い合わせ。しかし答えは見つからず、小泉の返事を待つ。小泉はメガネをくいっと上げた。

「ラブライブは……」

「分かった! スクールアイドルの祭典だね! だつて書いてあるもん」

高坂が話を遮り、画面に表示されたものを読み上げた。

「あ、ホントね。全国のスクールアイドルを集めて一番を決める……少し面白そうね」「よし! ジャあこれを目標にしよう!」

とんとん拍子に話を進めていく高坂に、最愛のアイドル話をとぎられて失意のそこにあつた小泉が、これだけはと言わんばかりに声を大にした。

「そ、そんな恐れ多い!」

「かよちん、震えてるにゃ!」

しかし、一度決めたりーダーは聞く耳を持たない。それは俺だけでなく、小泉も、そしてここにいた互いがそれを理解していた。

「大丈夫! 全国から選び抜かれたスクールアイドルが集まるなんて素敵過ぎるよ!

「そうよ花陽! これは出るしかないわ!」「かよちん?」

「花陽ちゃん？」

「花陽？」

対して事情なんて知らないくせに、日々に小泉を懐柔しようとしていた。俺はぽかんと開けていた口を閉じる。あまりにスピードイで少しほーつとしてしまっていた。しかし、俺が口を出すところでもないだろう。

「うう……」

小泉の唸り声がちょっと可愛い。やつぱり戸塚と小泉は天使。まあ小町は大天使。

「大丈夫大丈夫。きっと出れるよ！」

相変わらず同じ言葉しか繰り返していない高坂だつたが、次の言葉に俺は固まることになった。

「会長さんもダンス教えてくれるんだし！」

「……へ？」

八人もいる中で、俺だけが素つ頓狂な声を漏らした。  
視界の端では懐柔された小泉が見えた。